０４／０９／０５　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：揺るがされぬ生涯を送るために
聖書箇所：ピリピ人への手紙　４章４節

平安に満ちた生涯、平和に満たされた人生、それは多くの人たちが望むことです。しかし、余りもの人生の困難さのゆえに、私たちの心はそのような平安を感じることなく過ごすことが多くあります。先日の台風ではこの辺りでもかなりの暴風に見舞われましたが、強い雨風は多くの被害をもたらして過ぎて行きます。私たちの人生の中にもそのような暴風を体験することがたくさんあります。私たちはそのような問題にぶつかる度に困惑し、思い悩み、喜びを失い、平安に欠けた人生を送りたくないと願っています。けれども、そのように思いながらも私たちの多くは同じように毎回毎回、問題が起こるたびに思い悩み、パニックを起こします。一体、私たちの何が問題なのでしょう。どうして私たちはしっかりと立ち続けることができないのでしょう？どうして私たちは心に平安を備え続けながら、喜びに満ち溢れながら、心が平和に満たされた生涯を生き続けることが困難なのでしょう？それができないと思うのでしょう？私たちの人生に平安はどこにあるのでしょう？一体それを決して絶えることがないと思うような困難に満ちた人生の中に、どのようにして見つけることができるのでしょう？一体それはどこにあるのでしょう？

パウロはピリピの教会に宛てた手紙の最後にいくつもの命令を書き綴りました。そこでパウロは、私たちが毎日のように体験する様々な不安や恐れ、思い煩いに打ち勝って、ほんとうに平安に満ちた人生を送ることができるように、そのことを教えようとしています。私たちがよく覚えているみことばをこれからしばらく見て行こうと思います。皆さんが覚えておられるのはピリピ４：６，７だろうと思います。けれども、それだけを見るのではないのです。その前後に非常に大切なことが書かれています。それらを合わせて考えることによって、初めて私たちはどのように神の前に平安を持ち続けてこの生涯を送ることができるのか、どのようにしてそれを実践することができるのか、その秘訣を学ぶことができるのです。これから数回に渡ってこの箇所を見て行きます。

☆平安を保ち続けて生きて行く秘訣

パウロはこの４：４－９に、私たちが平安を保ち続けて生きて行く秘訣を教えているのですが、今日見るのは、パウロが与えるこの一連の命令の中にあって、一番最初に記していることです。４－９節のうち、私たちが平安に満ちた生涯を送るために絶対に必要な条件は何なのかを４－５節で教え、実際に思い煩いにぶつかったときに、そのような不安が私たちを襲ったときに、どのようにそれを解決したらよいのかというその方法を６－７節で教えます。そして、その方法を用いて思い煩いや不安などの様々な問題に勝利して行くときに、その後にどのような人生を私たちが歩んで行くべきなのかを８－９節で教えるのです。ですから、これらを全部見なければなりません。どれかひとつだけでは十分ではないのです。私たちはパウロがピリピの教会に語った命令を見て行きますが、これを通して、私たちが一体どのようにして平安に満ちた人生を歩んで行くことができるのかを学んで行きます。パウロが言う命令に対して、「私はそれを行なっています。忠実に守っています」ということができるなら、そのとき私たちの人生は平安に満ちたものになっているでしょう。パウロが与える命令を注意深く一つ一つ見て行くことによって、私たちはその方法を身につけて行くのです。そうすれば、私たちがどれほどの強風の中に立たされたとしても、揺るがされることなくこの人生を歩んで行くことができるのです。みことばを見ましょう。４－９節です。

「4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。:5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。:6 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。:8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。:9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」

この初めの部分、４－５節にある一つの命令を見て行きますが、今日は４節だけしか見ません。４節でパウロは何を言おうとしているのでしょう？それは私たちが平安に満ちた人生を送るために必要な条件が何なのかということです。

平安に満たされるための必要条件

１．私たちが喜ぶこと

「聖書的な喜び」が平安に満ちた生涯を送るために必要な条件なのです。この「喜び」はピリピ人への手紙のテーマでもあります。パウロは「喜び」また「喜ぶ」ということばを、彼の書簡の中で４８回使っていますが、そのうち実に１５回このピリピ書の中で使っているのです。この手紙を通してパウロは自分自身が喜んでいること、また、その同じ喜びをもってピリピの教会の人たちが生きることを願っていたのです。この手紙の最後の部分にあってパウロは人々に命じるのです。喜んでいなさいと。そして、このことばを強調することによってパウロは、聖書的な喜びをもつことがいかに重要なことであるのかを教え、それを常に持ち続けなければいけないと人々に語ったのです。パウロは言います。**「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」**と。なぜ繰り返したのでしょう？Ｉテサロニケ５：１６にも同じ命令が出てきます。**「いつも喜んでいなさい。」**と。このときは１回しか言っていません。けれどもここで２回繰り返しているのは、パウロは喜ぶことの重要性を人々に強調したかったと考えて当然でしょう。ある意味、単純で明快な命令です。けれども、私たちはこの命令を正しく理解しなければなりません。

●聖書的喜びとは何でしょう？

（１）それは感情的な喜びではない

私たちは「いつも主にあって喜び歌おう」と賛美しますが、あなたはそうでしょうか？残念ながら、多くの場合私たちが考えているのは、確かにパウロはそのように命じてはいるが、そのようなことは「できません」と思っているのです。なぜなら、私たちが考えている喜びは感情的な喜びだからです。だから、悲しいことや辛いことがあると喜びの感情など持てないのです。たとえば、最近この教会でも新しいいのちが誕生しましたが、それは親でなくても喜ばしいことです。しかし、もし愛する人を失ったとき私たちはそれと同じ感情を持つことができるでしょうか？もし、その感情的な喜びを命じられているとするなら、私たちは「できません」と言うしかありません。

（２）環境や状況によってもたらされるものでもない

また、多くのとき、私たちは喜びを幸福と同じ意味のこととして捉えます。けれども、私たちは幸福を計画することができるでしょうか？幸福になるためのステップを考えることはできますが、いついつに私は幸福になりますと言うことはできません。私たちが幸福ということばを使うのは、周りの状況が私たちに満足や喜びをもたらすときです。私たちは周りの状況を支配することもできません。何が起こるのか分からないからです。もし、周りの状況が私たちに良いことをもたらす、そのようなときに私たちは喜ぶことができると考えているなら、私たちはこの命令を実践することは絶対にできません。周りの状況はある日突然私たちにとって最悪のものに変わって行くからです。私たちが感情や周りのできごとに喜びを見い出そうとするなら、それによっていつも喜ぶことをしようとするなら、「いつも喜ぶ」ことはできませんと言わなければなりません。良い時には喜べるけれど、悪い時には喜べませんと。しかし、パウロが命じることは無条件で「いつも喜び続けなさい」です。

⇒では、どのような「喜び」が私たちにそのような「喜び」をもたらすのでしょう？パウロが教えるのは「聖書的喜び」です。感情でもない、周りの出来事に支配されるものでもない。この「聖書的喜び」を一言でまとめるなら、私たちの偉大なる神に依存する喜びです。私たちが神との和解を得ているゆえに、神によって愛され祝されているというその事実があるがゆえに、私たちが確信をもって言うことができる喜びなのです。どのような状況が私たちの周りにやって来たとしても、その状況が私の心の状態を支配することがないという確信です。それゆえに、たとえ周りの状況が暗黒に満ちていたとしても、私たちの前に苦々しいものであったとしても、クリスチャンであるなら喜びを持つことができるのです。神との関係があるからです。ある一人の牧師は、その注解書の中でこのようなことを言っています。「クリスチャンが喜びを失うという事実を正当化できる唯一のときは、私たちが罪を犯すときだ」と。そして、詩篇５１：１２のダビデのことばを引用して説明します。**「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。」**、ダビデはどのようなときにこの祈りを捧げたのでしょう？５１篇は罪の告白の祈りです。彼が罪を犯したとき彼の心は責められ喜びが無くなったのです。なぜでしょう？罪を犯すと神との関係が乱れるからです。確かにクリスチャンは根本的な罪の問題を解決されました。キリストの贖いのわざ、それを信じることによって…。けれども、その後も私たちが罪を犯すなら、それによって責められ心から喜びが無くなって行くのです。けれども、神と正しい関係をもっているなら、クリスチャンにとって喜べないというときはないのです。喜びは神との関係に掛かっているからです。

「喜び」ということばは、外的状況ではなくて霊的事実に基づいた幸福感を表わすことばです。神が主権者であること、その神との関係が良いものに変えられたことを知っているクリスチャンが持つことのできる態度なのです。私たちはパウロが言う「喜び」を良く理解しなければなりません。そうでなければ、私たちは「喜びなさい」という命令に対して喜べない自分に悩み続けなければならないからです。

私たちの本当の喜びは神との関係にあると言います。この「喜び」をどのように定義するべきでしょう？次のように記された箇所を見つけました。『喜びとは感情ではありません。喜びとは神が信徒の最善のため、また、ご自身の栄光のために、あらゆる事柄を支配しておられるということ、それゆえに、どのような状況にあってもすべてが万全であるという根底からの確信です。』、これが「聖書的喜び」です。すべてのことが万全であるなら、周りの状況には左右されません。何が起こっても万全だからです。それを確かに知っているから私は喜べると言います。あらゆることが最善であるとクリスチャン一人一人が正しく理解して行くとき、私たちはこの世の中の変わり続ける状況の中で、絶えることがないと思われるようなあらゆるチャレンジの中、困難の中で、私たちは言うことができるのです、私は喜べます、喜んでいますと。

この喜びを実践した一人の人がいます。１８００年代の後半に生きていたアメリカ人です。彼の名はスパフォード(Spafford)と言います。彼は非常に成功を収めた実業家であり弁護士でもありました。彼の生涯の大半は平穏無事ですばらしい家庭を築いていました。彼はすばらしい信徒であり、すばらしいリーダーでした。ところが、彼の人生に大きな転換期が訪れるのです。愛していた息子が突然亡くなり、その後に1871年、シカゴの大火災によって彼は財産の多くを失いました。その２年後、彼の親友の一人であったムーディーという有名な宣教師がヨーロッパで行なっていた宣教の働きに加わるために、家族を連れてヨーロッパへ渡ろうとして、彼は自分自身と妻、４人の娘たちのために船を予約します。出発の日に彼だけが止むをえない仕事のゆえに家族を先に送って、後に彼らと再会する約束をして別れたのです。船は出航して行くのですが、1873年11月22日、その船は大西洋の真ん中でもう１艘の船と衝突しました。何百人もの乗客を乗せた豪華客船はわずか１２分で海底に沈んで行ったのです。実に２２６人の人たちがそのときに亡くなったことが記されています。助かったのは４７人、その内の一人が彼の妻でした。助けられてヨーロッパに渡った妻はそこから夫に電報を送ります。英文でたった一文字記されていたそうです。私だけが助かったと。その知らせを受けたスパフォード氏は急いで船を予約し、妻の待つヨーロッパへ渡るのです。大西洋を航海していたとき、その船の船長が彼を自分の部屋に呼んでこう言ったそうです。非常に細かい計算がされて今私たちはまさにあなたの家族が乗っていた船が沈んでいる場所にいるのですと。この事故の後に生まれた彼らの娘さんの記事によると、スパフォード氏はそのすぐ後に彼の親族に宛てて手紙を書いたそうです。その内容は「この間の木曜日、私たちは海底深く沈んだ船の上を通ったのです。けれども、私はそこで自分の愛する者たちのことを思い浮かべることはしなかった。彼らは今安全なところにある。彼らを愛するすばらしい方の腕に抱かれて安らかである。私たちももうすぐそこにいっしょにいるようになるから。ただそれまでの間、私は神に感謝する。私たちには私たちを愛し、憐れんでくださった方をほめたたえ、仕える機会がまだ与えられているから。私は主を私のすべてをもってほめたたえる。私たち一人一人すべて、立ち上がってすべてを捨て去り、彼に従おうではないか。」と。このスパフォード氏は私たちがよく知っているすばらしい讃美歌を書かれた方です。「すべては万全である」と歌った讃美歌です。日本語ではその部分を「心安し」と訳されています。この歌は彼が大西洋を航海中に娘たちが沈んでいった場所のすぐ近くで書かれたと言われています。１番と２番、直訳ですが紹介しましょう。**「おだやかな川のような平安が私の行く道に伴うときは、荒れ狂う大波のような悲しみが押し寄せたとしても、私の受けるべき分がたとえ何であったとしても、あなたは私が知ることができるように教えてくれた。すべては万全であると。私のたましいにとってすべては万全である。サタンが私を打ちつけることがあったとしても、試練が私の上にやって来たとしても、この神聖な確信に私は私の心を支配させよう。」**。この確信とは「キリストが無力な私の状態を見つめてくださり、私のたましいのためにご自身の血を流してくださったこと。」と説明します。スパフォード氏はこの歌を書いたとき幸せだったでしょうか？娘たちが沈んでいるその上を通って行く船上で、すべては万全だと心から思ったのでしょうか？心騒ぐことはなかったのでしょうか？悲しみに満ちることはなかったのでしょうか？子どもをもつ親なら分かります。悲しくないはずはないのです。辛くないはずはないのです。しかし彼は言います、たとえ悲しみ苦しみが私の心を満たしたとしても、私が受ける定め、分が何であったとしても、私はあなたによって教えられたことがある、すべては万全であると。だから、彼は喜んだのです。このようなすばらしい歌を歌えたのです。

パウロは言います。私たちは聖書的喜びを持つことができると。それは私たちの周りの状況に関わるのではなくて、神との関係に見い出すことができるのです。そして、それを私たちが持って生きるときに私たちはスパフォード氏と同じように、どのような状況の中でも喜ぶことができるのです。

●<u>この喜びはどこから来るのでしょう</u>？

三つのことを挙げることができます。この聖書的喜びは（１）<u>神から与えられます</u>。神に起源があるのです。神の贈り物です。詩篇４：７－８でダビデはこのように歌います。**「あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。:8 平安のうちに私は身を横たえ、**

すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」と、喜びと平安の関係を歌っています。ダビデはよく分かっていたのです。私たちが得ることができるこの地上の何であっても、私たちにほんとうの喜びを与えることはできないことを。それが私の心を満たすこともない、それが永遠に続かないことを知っていたのです。一体何が私たちの心をほんとうに喜びで満たし、それが変わることなく与えられ続けるのでしょう？神が与えてくださらなければできないことなのです。ダビデはまたこのようにも歌っています。詩篇１６：１１**「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」**と。神には喜びがあるのです。それは私たちを満たし、私たちに継続的に変わることなく永遠に与えられるのです。いつも喜ぶために神が与えてくださるこの喜びが必要なのです。どうしてそれを得るのでしょう？神との和解があって始めて得ることができるのです。またこの喜びは（２）私たちの主イエス・キリストが約束してくださったことです。ヨハネ１５：１１に**「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」**と言われています。**「これらのこと」**とは「主はぶどうの木」ということです。私たちがキリストとつながっており、キリストの内にあるというすばらしい特権、重要性です。なぜそのように話されたのか、それは**「わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」**と。私たちが主とつながっているときに、主のうちにあるときに、キリストは私たちに約束してくれるのです。喜びを与えると。イエス・キリストが持っておられた喜びとは、ヘブル１２：２に**「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」**とあります。イエスは自分に与えられた喜びがよく分かっていましたから、ご自分の前に置かれた杯を喜んで飲まれたのです。私たちが救われることを神が喜ばれるからです。この喜びは、私たちがいつか必ず神から受ける祝福をしっかり見据えているゆえに、今現在どのような困難が私たちの前に置かれたとしても、この喜びのゆえにそこを真っ直ぐに進んで行くことができるその喜びなのです。神につながっているときに、イエス・キリストにつながっているときに、そこに喜びがあるのです。イエスはそれを私たちに約束してくださったのです。父なる神がそれを与え、イエス・キリストが約束しているのです。そして聖書的喜びは（３）聖霊なる神からも与えられます。パウロはガラテヤ人への手紙の中で御霊の実が何なのかを教えています。**「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、…」**と。聖霊が私たちの内に喜びを生み出し、喜びの実を実らせてくださるのです。このことを私たちが確かに理解するなら、私たちは神の前に言うことができるでしょうか？「私は喜ぶことができません」と。もうそれは私たちにあふれるばかりに与えられているのです。言い訳はできません。私たちが根底にもっているこの聖書的喜びを取り除くものは何もないのです。しかし、これらを理解しても現実にはなかなかそれはできないものです。何が足りないのでしょう？どうすればその喜びを得ることができるのでしょう？

●「聖書的喜び」を得るために

絶対的条件は私たちが救われていることです。救われている私たちがどのようにしてこの喜びをもっていつも変わることなく喜んで生きることができるのでしょう？

（１） 聖霊に満たされていること

喜びは御霊の賜物です。聖霊が喜びを生み出すことができるような状態に私たちがいなければそれは生まれてきません。御霊に満たされて生きることは、御霊に支配されることです。聖書の中には「満たされる」ということばが使われている箇所がありますが、たとえば「悲しみに満たされる」とか「怒りに満たされる」ということばがあります。これらは「聖霊に満たされる」と同じことばです。それは悲しみが、また怒りが心を支配している状態です。同じように、私たちは御霊によって私たちの心が支配されないといけないのです。御霊が願うことを私たちが願うように、神が願っていることを追求して行くのです。

（２） みことばに従うこと

御霊に満たされるためにはみことばをよく理解し、実践しようとしなければなりません。神が願うことはみことばの中に記されているからです。それに逆らって生きようとするなら喜びに満たされることはありません。私たちがみことばを蓄えて行くとき、それは私たちの心に喜びを与えます。エレミヤ書１５：１６**「私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。」**、詩篇１９：８**「主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする。」**、このように記されています。詩篇１：２では**「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」**と、原文では「みことば以外のところに私は（喜びを）見い出すことができない」と言っています。みことばだけが私に喜びを与えると。

（３） 私たちの思い（考え）を導く必要がある

ヤコブ１：２を見ましょう。**「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」**と、そのように考えなさい、あなたの考え方をそういうふうに導きなさいと言います。ここでヤコブが言っていることは、パウロがピリピ４：４で言うことと同じことです。どのような状況にあっても、あなたは自分の考えがみことばの真理に沿うことができるようにあなたの思いを導かなければいけないということです。あなたのもっている神とのすばらしい関係に思いを寄せなさいと。それゆえに、何が起こったとしても、すべては万全であるというその確信を持っているがゆえに、試練のときでも幸いなのです。なぜなら、神は最善をなしておられるから、それによって神の栄光があらわされるからです。

私たちの感情があらぬ方向に進んで行き、私たちが生きている様々な状況が私たちが神を憎む方向へと私たちを引き寄せようとするときに、私たちは自分の中での戦いがあります。自分の思いを正しい方向へ導くという戦いです。もう一度、聖書的喜びの定義を見ましょう。『喜びとは感情ではありません。喜びとは神が信徒の最善のため、また、ご自身の栄光のために、あらゆる事柄を支配しておられるということ、それゆえに、どのような状況にあってもすべてが万全であるということを根底から確信していること。』。スパフォードという人物はそのような確信をもっていました。私は神との和解を得ているゆえに、神がなさることは最善であると知っていると。２番の歌詞はこのようでした。**「サタンが私を打ちつけることがあったとしても、試練が私の上にやって来たとしても、この神聖な確信に私は私の心を支配させよう。」**と。この確信は「キリストが無力な私の状態を見つめてくださり、私のたましいのためにご自身の血を流してくださったこと」でした。ここに喜びの根源があるのです。

このような喜びを私たちがもっているなら、私たちは思い煩うことなどないはずです。私たちが平安に満ちた生涯を、揺るがされることのない人生を送るために、私たちは喜びをもつことが必要条件です。その喜びをもったときに私たちは揺るぐことのない主の前に平安に満ちた人生を歩んで行くことができるのです。そのような人生を私たちも皆、パウロのように、スパフォードのように、歩むことができれば何とすばらしいことだろうと心から思います。